

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2015.12) 平成26年度:20.

生体肝移植後、予期せぬ廃用症候群となった患者の身体変化に対する
受容過程と看護介入

池生 瑛美、末次 さゆみ、田中 理佳、古川 博之

生体肝移植後、予期せぬ廃用症候群となった患者の身体変化に対する受容過程と看護介入

旭川医科大学病院 6階東ナースステーション ○池生 瑛美、末次さゆみ、田中 理佳
旭川医科大学 外科学講座 消化器病態外科学分野 古川 博之

【はじめに】

生体肝移植後、廃用性症候群となった患者に身体・心理変化に合わせ介入し、退院できた事例を経験した。

【目的】

廃用性症候群となった患者の身体状況の受容と心理変化について看護診断に基づく介入効果を明らかにする。

【方法】

- 1) 対象：肝移植後、廃用性症候群となった患者1名。
- 2) データ収集方法：看護診断とその記録をデータとする。
- 3) データ分析方法：看護診断をタイトルとした記録から介入内容と患者の言動を意味・内容で分類しコーンの段階理論を用いて分析する。

【結果】

1) ショック：挿管管理から離脱の時期は「動けないなら手術しない方がよかった」と予期しない身体状況を受容できず、過度の期待やストレスを予防する為にND1 コーピング促進準備状態と診断した。

2) 回復への期待：ギャッジアップで過ごした時期は、ND2 身体可動性障害で患者と目標設定し他職種と共有した事で「どの位で歩けるかな」と回復への期待が増した。

3) 悲嘆：医師が独歩での退院は難しいと説明したが受け入れられず、「食事が楽しくない」と味覚障害で摂取が進まず落ち込み、ND1 で他職種とカンファレンスを通じ氏の思いを共有しND2 を継続した。

4) 防衛：車椅子移乗が自立した時期は「車椅子のまま帰る」と現状を認識でき、ND2 の目標を車椅子での生活がイメージできるとした。

5) 適応：車椅子での生活に向け社会資源の調整と自宅を改修し、ND1、ND2 は解決した。

【考察】

上田は障害の受容とはあきらめでも居直りでもなく、障害に対する価値観の転換であると述べている。氏は退院時のADLを車椅子での生活へ転換できた事が身体状況の受容へつながった。移植医療では多職種との連携が不可欠であり、目標を共有し継続的に介入することが必要である。ND1 で各時期の身体状況に対する受け止めを確認し他職種と共有し各専門職がアプローチしたこと、ND2 で段階的に目標設定した事が、自己効力感を高め適応を促進したと考える。